已、○略下

〔假名世說〕南京陶工に、五郎太夫吳祥瑞造と銘を書きたるあり、祥瑞は日本勢州松坂の陶工なり、入唐の間、彼邦にて製したる物なりといふ、明の正德八年歸國の時、季春亭なるもの、送別の詩あり、送居士五郎太夫歸日本、

敬將玉帛覲天顏、回香扶桑杳渺間、舡泊古鄰三佛地、杯傳新酒四明山、梅黃細雨江頭別、帆引清風海上還、明主貴王應有問、八方財貢溢朝班、と聞けり、實に名譽の陶工といふべし、

留名於後代

〔日本書紀七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、○略中既而崩于能褒野、時年三十、天皇○景行聞之、寢食不安席、食不甘味、晝夜喉咽、泣悲摽擗、○略中因欲錄功名、卽定武部也、

〔日本書紀十七繼體〕元年二月庚子、大伴大連○金村奏請曰、臣聞、前王之宰世也、非維城之固、無以鎭其乾坤、非掖庭之親、無以繼其趺蕚、是故白髮天皇○清寧無嗣、遣臣祖父大連室屋、每州安置三種白髮部言三種者、一白髮部舍人、二白髮部膳、三白髮部靱負、以留後世之名、○略下

無雙譽

〔常山紀談十四〕立花宗茂使を城中にたてゝ、けふ味方討死の中に、十時傳右衞門と申者あり、とりわきて不便に存るなり、骸を返し給り候へとて、物具の色を書て、言送られしかば、やがて返しぬ、又城中よりも山田三右衞門が首を返し給はれと望れしかば、冑を添て送られけり、此を大津の死骸返しとて、勇士死後ほまれとしたり、

〔大鏡三太政大臣實賴〕あつとしの少將の男子佐理大貳よのてかきの上手任はてゝのぼられけるに、いよの國のまへなるとまりにて日いみじうあれ、海のおもてあしくて、風おそろしう吹きなどするを、すこしなをりていでむとし給へば、又おなじやうにのみなりぬ、かくのみしつゝ日ごろすぐれば、いとあやしくおぼして、ものとひ給へば、神の御たゝりとのみいふに、さるべき事もなし、いかなる事にかとおそれ給ひける、夢に見え給ひけるやう、いみじうけだかきさましたる